

子どもの心電図検査を調査した「生活クラブ生協取手支部」の根岸裕美子代表(左)と「とりで生活者ネットワーク」黒澤仁美代表(右)



子どもの心電図異常増加

「被ばくとの関連心配」

取手の市民団体調査

取手市教育委員会が学校保健法に基づいて小学1年生と中学1年生を対象に実施した学校検診の心電図検査(心臓検診)で、2011年度以降、心臓に異常や病気があると診断された児童・生徒数が増えていることが市民団体の調査で分かった。調査を実施した「生活クラブ生協取手支部」の根岸裕美子代表(42)は「福島原発事故が起った2011年から増加している。取手は放射線量が高い地域なので被ばくとの関連が心配だと話している。」

同支部と市民団体「放射能NO!ネットワーク取手」(本木洋子代表)、「とりで生活者ネットワーク」(黒澤仁美代表)の3団体が、同市教委が開示した資料をもとに分析した。

調査結果によると、心電図の異常は2011年度から増え始め、12年度は、精密検査が必要とされた児童・生徒数は5・26%と08、10年度まで3年間の2・9、6・4倍に増え、さらに精密検査の結果、病気や異常と診断され管理が必要とされたのは児童・生徒の1・45%と、10年度までの3年間の2・2・7倍に増えていることが分かった。

一方、精密検査が必要とされた児童・生徒のうち、28%はまだ精密検査を受けておらず、病気の管理が必要と診断される児童・生徒数は今後さらに増えることが考えられるという。

根岸さんは、チェルノブイリ原発事故の健康影響調査で、放射性セシウムが心臓に蓄積するとの研究結果があることなどから「被ばくが関係しているの

ではないか」という疑いがぬぐいきれない」と話し、「病気の子が増えているのは事実なので、原因を調査してほしい。小学1年生と中学1年生だけの検査では取りこぼされる子どもが出てきてしまうので、全児童・生徒を対象に毎年検査を実施してほしい」などとしている。

藤井信吾取手市長は取材に対し「データに有意性が

あるかよく分からないので、医師会の先生にデータの見方や意味などを確認して検討を考えたい」と話している。

(鈴木宏子)